

北海道苫小牧国際リゾート構想・IR誘致に向けた 取組状況について

令和4年2月
苫小牧市

- 本市は、人口減少と少子高齢化が進む中、将来も持続可能なまちづくりを続けていくため、ものづくり産業のさらなる展開、臨海ゾーンにおけるロジスティクスの展開、臨空ゾーンにおけるIRを含む国際リゾート構想の実現にチャレンジしてきたところであり、引き続きその具現化に向け取り組んでいる。
- 令和3年3月には、この3つの成長戦略の方向性を示す「都市再生コンセプトプラン」を策定し、交流人口の増加を図り、環境と産業が共生する持続可能な都市の実現に向け、各種施策に取り組んでいるところである。
- また、本市では、この環境と産業が共生する持続可能な都市の実現に向けた取組の一環として、8月には「ゼロカーボンシティ」への挑戦を宣言したほか、生物多様性の保全及び持続可能な利用を推進するための取組を進めている。
- 本報告は、上記のまちづくりの方向性を踏まえ、近年のSDGsやゼロカーボンの実現に向けた取組、デジタル技術による変革などポストコロナ時代に向け、改めて本市における国際リゾート構想実現の意義、開発にあたっての考え方を示す。
- また、令和2年12月に公表した「北海道苫小牧国際リゾート構想・IR誘致に向けた取組状況」以降に実施したIR候補地の環境現況調査の結果と、本市におけるIR候補地における環境対策について改めて考え方を示す。

北海道苫小牧国際リゾート構想・IR誘致に向けた取組状況（R2.12）のポイント

IR候補地に対する考え方	自然環境対策への対応と考え方	インフラ整備の考え方
<ul style="list-style-type: none"> IRを整備する上では、国内外からの交通アクセスの利便性などの経済的・社会的条件は極めて重要であり、現候補地である植苗地区は、自然との共生という可能性を有しているだけでなく、国際空港である新千歳空港に隣接していることが大きな強み 日本型IRは、日本の魅力を世界に発信し、国内外から多くの観光客を惹きつけることが求められており、世界でも類を見ない魅力あるリゾートとしなければならず、北海道らしいIRは、大都市型とは一線を画す自然と共生した魅力あるリゾートでなければならない 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの調査及び環境保全措置の整理により、現候補地における開発に当たっては、動植物に対する影響の回避・低減の可能性があると判断したことから、IR事業地として特定 開発を行う際には周辺地域を含め自然環境の保全、質の維持・向上を図り、環境と共生した国際リゾートの実現に向け取組を進めていく 	<ul style="list-style-type: none"> ◆道路整備について <ul style="list-style-type: none"> 新千歳空港及び市街地接続道路は市が整備 新千歳空港からのアクセスは、事業者によるBRT等の輸送システムの構築、整備により、短時間の大量輸送を実現 IRダイレクトIC設置を事業者に求め、道内等とのアクセスを強化 ◆上下水道整備について <ul style="list-style-type: none"> ウトナイ湖等、自然環境への影響を最大限に考慮し、地下水は使わず、市が公共上下水道を整備・連結

本市として、現候補地である植苗地区を北海道IRの候補地として特定

〔IRに関連する動向〕

区分	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度～
国	12月 IR基本方針決定 申請期間を定める政令公布 〔令和3.10.1～4.4.28〕		申請受付 (4/28まで) →審査→区域認定 (最大3か所)	法律の施行状況検討 〔最初の区域整備計画の認定日から5年を経過した場合〕
北海道	3月 申請見送り表明	10月 総合計画改訂 11月 第5期北海道観光のくにづくり行動計画策定 →北海道らしいIRコンセプト構築を掲載	取組を継続 →	
苫小牧市	12月 北海道苫小牧国際リゾート構想・IR誘致に向けた取組状況を報告	1月 追加環境調査 →	8月 2月 環境影響評価調査結果改訂 北海道苫小牧国際リゾート構想・IR誘致に向けた取組状況を報告	取組を継続 →

苫小牧市の抱える課題

- 人口減少・少子高齢化（2040年には人口は約14万人に）
- 若年層の市外流出が続いている
- 新産業の必要性（既存ものづくりに加えてもう一つの柱となる新産業）
- 中心市街地の空洞化（苫小牧駅～市役所周辺）
- 公共インフラ老朽化に伴う更新費用の増加
- 交通ネットワーク維持コスト

人口減少・少子高齢化 中心市街地の空洞化 新産業の必要性

苫小牧市の強み・立地特性

- 国際空港である新千歳空港を擁している
- 自然豊かな環境を有する北海道の最大の工業都市、ものづくりのまち
- 北日本最大の国際貿易港を有している
- 札幌都市圏と良好な交通アクセスで結ばれている

産業拠点都市 北海道の陸・海・空の要衝（ゲートウェイ）

千歳・苫小牧地方拠点都市地域

新千歳空港を核とし、空港が所在する千歳市・苫小牧市及び周辺市町を含めた3市3町が一体となって高次都市機能・産業機能等の集積を促進することにより、地域全体の振興・活性化と北海道全体の発展を牽引する地方拠点都市地域の形成を図る。

国際的な産業交流拠点の形成

+ **ポストコロナを見据えて**

- ポストコロナの北海道経済再生→新たなビジネスチャンスによる雇用確保
- 持続的な観光関連産業の発展→量×質の追求・新しい旅行スタイルの推進
- 環境配慮型のモデル事業としての先導性→ゼロカーボンへの貢献
- 脆弱な財政基盤の再構築→新たな財源の確保とインフラ基盤の強化

I Rの認定基準

- ◆ 国際競争力の高い滞在型観光の実現のため、I R 区域は国内外の主要都市との交通の利便性に優れた地域であること
- ◆ 日本型 I R は日本の魅力を世界に発信し、国内外から多くの観光客を引きつけること

国際リゾート構想 IR基本コンセプト

自然を活かした健康づくりと癒しの提供

- アドベンチャートラベル
- ワーケーション・グランピング
- アイヌ文化体験施設
- スポーツツーリズム

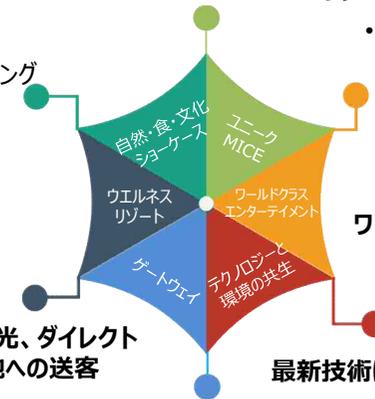
国内外の富裕層の集客効果の実現

国際空港に隣接したアクセス至便なリゾート型MICE

- 自然・環境・食等北海道の強みを活かしたオンリーワンの世界的リゾートMICEの創出

**学術レベルの向上
新たな産業・ビジネスの創出**

**ワールドクラスの魅力を創出
エンターテインメント産業振興の実現**



IR訪問客の道内周遊観光、ダイレクトインバウンドの国内観光地への送客

- 北海道観光のコンシェルジュ機能
- 道内観光のショーケース機能
- 釧路を含む道東観光圏との連携

**北海道エアポート、JR北海道との連携による
広域周遊観光の実現**

最新技術による環境と共生したIRの追及

- ゼロカーボン・再生エネルギー
- 生物多様性・SDGs
- 未来技術の実証フィールド

**ニューノーマル社会の最新技術による
スマートシティの実現**

世界でも類を見ない環境と共生した I R

国際リゾート構想 IR相乗効果

北海道ゲートウェイ機能強化

- 航空需要の増加
- クルーズ船誘致・北極海航路の発展
- 物流機能向上・北海道農産品の輸出促進
- 札幌圏との2次交通ネットワークの強化

持続可能なまちづくり・交流人口の増加

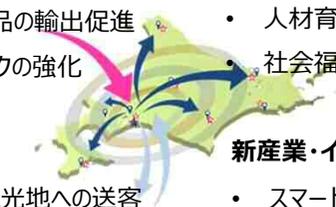
- 新たな雇用機会の創出・IUターン
- 更なる企業立地・地域産業の振興
- 人材育成・教育振興
- 社会福祉の増進・文化芸術の振興

北海道観光産業の振興

- ダイレクトインバウンド・道内観光地への送客
- 広域観光ネットワークの充実
- 北海道ブランドの向上

新産業・イノベーションの創出

- スマートシティの実現・MaaS
- ゼロカーボン・再生エネルギー
- 生物多様性の実現



社会課題の解決

北海道の産業及び文化等の発展と経済の活性化に貢献

IR候補地の現況

◆「優れた交通の利便性」

ダブルポート（新千歳空港、苫小牧港）、札幌都市圏との良好なアクセス

◆「自然豊かなリゾート環境」

候補地とその周辺には二次林が植生し、近隣には、手つかずの自然林を残すラムサール条約登録湿地のウトナイ湖、北大研究林、あるいは樽前山麓などが広がる大都市型とは一線を画すリゾート環境を有する

◆「産業集積・ビジネス観光拠点」

苫東工業団地が隣接し産業が集積。支笏湖・登別温泉・ウポポイ・ゴルフ場・馬産地など近隣観光地と連携が可能

◆「低い自然災害リスク」

候補地周辺は津波や洪水などの浸水区域外であるため、他地域と比べ自然災害のリスクが低く安定性の高い立地環境である。



北海道の植苗地区IR候補地に対する考え方（令和元年11月時点）

【候補地：植苗地区】

- ・森林に囲まれた自然豊かな場所
- ・保護すべき希少な動植物の生息場所

自然環境への配慮が不透明

【開発にあたっての課題】

大規模開発を行う場合には環境への影響を事前に調べ、そこで開発を行うことが可能かどうか予測をたて、評価をする「環境アセスメント」を行う必要がある。

- ・50ha以上⇒北海道環境影響評価条例に基づく環境アセスメント
- ・50ha未満⇒条例に基づくアセスメントと同水準の対応

苫小牧市の自然環境への対応・考え方

環境現況調査

（平成30年6月～令和3年11月）

令和2年6月に公表した環境影響評価調査結果で有識者から不足していると指摘された項目も含めて、令和2年4月～8月、令和3年2月～11月に現況調査実施

⇒保全に向けた考え方等を整理

IR候補地における自然環境に係る課題について、一定の整理が完了

IR候補地の開発に係るコンセプト

IR誘致を進める立地市町村として、事業者を求める配慮事項を整理

【開発コンセプト】

- ・多様性の推進、ゼロカーボン、SDGs等の観点での開発を事業者に要求
- ・開発面積（道路等のインフラを含む）は、環境への影響を最小限とするために50ha未満
- ・保全措置についても、希少種の単純な移設等は認めず、開発前よりも周辺地域を含めた自然環境をより豊かにするような開発を目指す

苫小牧市生物多様性専門家会議(令和3年度)

「苫小牧国際リゾート構想」に係る事業概要、開発区域、市としての方針、主な環境影響評価調査の結果を「開発の動向」として提示

今後の苫小牧市の生物多様性に係る施策の方向性に対する専門家の意見として、生物多様性地域戦略の策定が示された

生物多様性地域戦略の策定に当たっては、IR事業を含め、各開発事業等を位置付ける

【IR実現に向けた想定プロセス】



【環境影響評価調査手法】

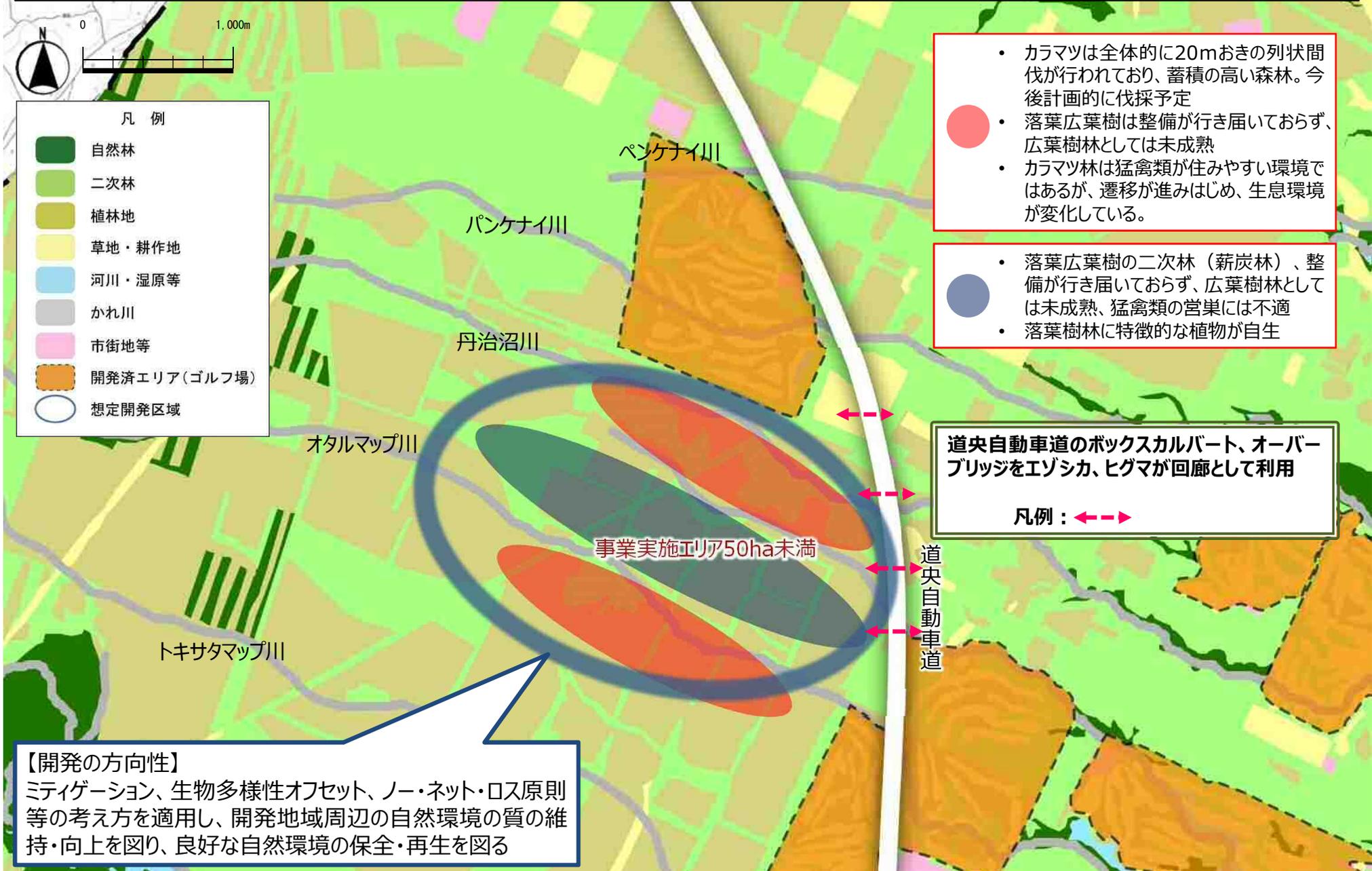
環境影響評価調査（令和2年6月公表）	環境影響評価調査の改訂（令和4年2月公表）	
1シーズン	2シーズン	3シーズン
<p>【現地調査・文献調査】</p> <ul style="list-style-type: none"> 概略調査及び植生調査：平成30年6月～8月 猛禽類調査（営巣・繁殖・保全対策モニタリング）：平成30年3月～令和2年2月 地下水調査：令和元年10月～12月 	<p>【現地調査】</p> <ul style="list-style-type: none"> オオタカ行動圏調査：令和2年4月～8月 	<p>【現地調査】</p> <ul style="list-style-type: none"> 植物調査（全般）：令和3年5月 動物調査（全般）：令和3年6月・8月 オオタカ営巣・繁殖・行動圏調査：令和3年5月～8月 ヒグマ行動圏調査：令和3年4月～11月 クマガウ営巣調査：令和3年2月～5月

【環境影響評価調査結果】

項目	確認された重要な種・現況把握状況	項目	保全に向けた考え方・保全策案
植生	<ul style="list-style-type: none"> 落葉広葉樹二次林及びカラマツ植林が大部分を占め、自然林は見られず、人為的な影響を受けた植生。 部分的に植生自然度の高いリノレーヤチダモ林が自生（ただし、現地調査及び1970年代の空中写真判読の結果、大部分は伐採後の代償植生であることが判明） 	植生	<p>〔措置〕 自然植生のハルニレーヤチダモ林に関しては保全、非改変を基本とする。伐採後に自生したもの（代償植生）は、豊かな森林資源となるよう森林管理を行う。</p> <p>〔参考〕 標津川自然復元川づくり（国土交通省北海道開発局）</p>
植物	<ul style="list-style-type: none"> ベニバナヤマシャクヤク、ボタン属の一種、サルメンエビネ、トケンラン、フクジュソウが自生 	植物	<p>〔措置〕 生育地は直接的には土地を改変しないよう留意。土地改変を避けられない場合には、移植等を検討。</p> <p>〔参考〕 忠類ダム建設事業（国土交通省北海道開発局）、道道きたひろしま総合運動公園線整備事業（北海道空知総合振興局）、ハツ場ダム建設事業（国土交通省関東地方整備局）</p>
哺乳類（全般）	<ul style="list-style-type: none"> ヒナコウモリ科 1 (25kHz)、ヒナコウモリ科 2 (50kHz)、エゾヒグマが生息 エゾヒグマの行動圏調査では、自動撮影カメラにより9地点でヒグマを撮影した。痕跡調査では、主に沢筋の樹林地で足跡、糞、食痕、爪痕が確認された。 	哺乳類（ヒグマ）	<p>〔措置〕 専門家指導の下で、複数年の調査及びヒグマの「回廊の確保」を実施</p> <p>〔参考〕 国有林野における緑の回廊の設定について（林野庁）、緑の回廊設定要領（林野庁）</p>
鳥類（全般）	<ul style="list-style-type: none"> エゾライチョウ、マガン、オオセグロカモメ、ハイタカ、オオタカ、クマガウ、オオアカゲラ、ヤマシギ等が生息または利用 オオタカ行動圏調査（2営巣期）により高利用域等を特定 クマガウについては、令和3年度の調査において営巣は確認できなかった 	鳥類（猛禽類）	<p>〔措置〕 営巣地の非改変と非繁殖時期の工事実施を基本とする。植生転換により樹林環境を創出・向上させるとともに、改変場所から離れた場所への営巣地の誘導も検討。</p> <p>〔参考〕 猛禽類保護の進め方（改訂版）（環境省）津軽ダム建設事業（国土交通省東北地方整備局）</p>
爬虫類	<ul style="list-style-type: none"> 重要種に該当する爬虫類の生息は確認されなかった 	爬虫類	—
両生類	<ul style="list-style-type: none"> エゾサンショウウオが生息 	両生類	<p>〔措置〕 生息可能な樹林環境が周辺に広く分布し、生息環境は維持される</p> <p>〔参考〕 道道きたひろしま総合運動公園線整備事業（北海道空知総合振興局札幌建設管理部）</p>
昆虫類	<ul style="list-style-type: none"> モンズズメバチ、チャイロスズメバチ、ジョウザンナガハナアブ、ナツアカネ、ヒメアカネ、テラニシケアリ、ゴマシジミ等 	昆虫類	<p>〔措置〕 生息可能な樹林環境が周辺に広く分布し、生息環境は維持される</p>
水環境	<ul style="list-style-type: none"> パンケナイ川、パンケナイ川等、調査区域の河川には水流が確認されない 浅部帯水層からの取水は、下流域の水環境に影響 深部帯水層は浅部帯水層に対して独立 	水環境	<p>〔措置〕 公共上下水道の整備で対応 下水の地下浸透及び地下水の取水は行わない</p> <p>〔参考〕 地下水保全ガイドライン（環境省）</p>

IR候補地の自然環境の現況

- ◆ 概況：周辺の地形は緩傾斜地。候補地は経済林として管理されているカラマツ植林、伐採後自生した落葉広葉樹林、利用されなくなった薪炭林等から成る
- ◆ 植物相：フクジュソウ、ベニバナヤマシャクヤク、サルメンエビネ、トケンラン等の落葉樹林に特徴的な重要種がみられる
- ◆ 動物相：猛禽類の営巣が確認されている。また、周辺の林道、高速下等をヒグマが回廊として利用。他に樹林を利用するコウモリ、エゾリス、森林性鳥類、昆虫を確認
- ◆ 河川：ペンケナイ川、パンケナイ川などの河川が存在するが、かれ川となっており水流は見られない



- カラマツは全体的に20mおきの列状間伐が行われており、蓄積の高い森林。今後計画的に伐採予定
- 落葉広葉樹は整備が行き届いておらず、広葉樹林としては未成熟
- カラマツ林は猛禽類が住みやすい環境ではあるが、遷移が進みはじめ、生息環境が変化している。

- 落葉広葉樹の二次林（薪炭林）、整備が行き届いておらず、広葉樹林としては未成熟、猛禽類の営巣には不適
- 落葉樹林に特徴的な植物が自生

道央自動車道のボックスカルバート、オーバブリッジをエゾシカ、ヒグマが回廊として利用

凡例：←→

【開発の方向性】
 ミティゲーション、生物多様性オフセット、ノー・ネット・ロス原則等の考え方を適用し、開発地域周辺の自然環境の質の維持・向上を図り、良好な自然環境の保全・再生を図る

IR候補地のインフラ整備の考え方

◆道路整備について

- ・ 新千歳空港からのアクセスは、事業者によるBRT等の輸送システムの構築、整備により、短時間の大量輸送を実現
- ・ IRダイレクトIC設置を事業者に求め、道内等とのアクセスを強化

◆上下水道整備について

- ・ ウトナイ湖等、自然環境への影響を最大限に考慮し、地下水は使わず、公共上下水道を整備・連結

IR候補地の開発手続

◆都市計画法について

- ・ 現候補地は市街化調整区域のため、千歳・苫小牧地方拠点都市地域基本計画※において、道が同意の上、拠点地区として指定
- ・ 事業者が苫小牧市に対し、都市計画法開発許可申請

◆森林法について

- ・ 森林の乱開発を防止し、森林の持つ機能の維持を図り、森林の土地利用を適正に行うため、現候補地で1haを超える開発行為を行う場合は、残置森林等を確保した上で、事業者が北海道に対し、林地開発許可申請

※ 新千歳空港を核とした高次都市機能・産業機能等の集積を促進し、地域全体の振興・活性化と北海道全体の発展を牽引する地方拠点都市地域の形成を目指す

道路整備について

整備区間	実施主体	延長(km)	概算事業費(億円)
新千歳空港接続道路	苫小牧市 事業者	4.6	63
市街地接続道路	苫小牧市	8.7	37
合計		13.3	100
スマートIC	事業者		(25)

上下水道整備について

項目	実施主体	延長(km)	概算事業費(億円)
上水道整備	苫小牧市	8.7	24
下水道整備	苫小牧市	13.5	54
合計		22.2	78

※ **インフラ整備の実施主体は市で、財源は、交付金、起債、事業者負担等、今後協議。**

